PROGRAM

グリーグ（1843～1907）：
《抒情小曲集》より
- アリエッタ op.12-1
- ワルツ op.38-7
- 蝶々 op.43-1
- 孤独なさすらい人 op.43-2
- ノクターン op.54-4
- 家路 op.62-6
- 過去 op.71-6
- 余韻 op.71-7

ドビュッシー（1862～1918）：
版画
- 第1曲　塔
- 第2曲　グラナダの夕暮れ
- 第3曲　雨の庭

喜びの島

―― 休憩 ――

ショパン（1810～1849）：
ノクターン第7番 嬰ハ短調 op.27-1

ノクターン第8番 変ニ長調 op.27-2

ピアノ・ソナタ第3番 ロ短調 op.58
- 第1楽章　アレグロ・マエストーソ
- 第2楽章　スケルツォ：モルト・ヴィヴァーチェ
- 第3楽章　ラルゴ
- 第4楽章　フィナーレ：プレスト・ノン・タント

PROGRAM NOTES

音楽ジャーナリスト：伊熊 よし子

作品が生まれた土地へといざなう想像性あふれる青柳晋のピアニズム

演奏、指導、コンクールの審査員など多忙を極める青柳晋は、長年に亙りとよなく愛すリストをメインにプログラムを組んできた。「今後は他の作曲家にも目を向け、新たな視点で演奏を行いたい」と語り、今回はグリーグ、ドビュッシー、ショパンが登場。作品の内奥を見つめ、作曲家の意図するところに肉薄し、真意を紡ぎ出すピアニズムは聴き手を作品へと自然にいざなう。今回の3人の作曲家の作品は、色彩感と表現力が豊かで想像力を喚起するもの。作品が生まれた土地の空気を運んできてくれるような響きを全身に纏いたい。

グリーグ：《抒情小曲集》より

「抒情小曲集」はグリーグが折にふれピアノの小品を書きとめ、何曲か集まると出版したもの。日々のできごとや周囲の人々の様子、自然、行事、風物などが音楽でスケッチのように描かれている。全部で第10集66曲におよぶ小品は1867年ころに書き始められ、以後40年近い年月に亙って書き続けられていく。

「**アリエッタ**」はわずか23小節のさりげない作品だが、清涼な美しさは心にいつまでも残る。「**ワルツ**」はシンプルでグリーグらしい曲調。「**蝶々**」はかろやかなリズムのなかに、どこか優雅な雰囲気を漂わせている佳曲。「**孤独なさすらい人**」は哀愁に満ちた流麗な旋律を持続音が支える。「**ノクターン**」は北欧の冷たくひんやりとした夜の空気を感じさせ、小鳥の声も聴こえる。「**家路**」は久しぶりに家路に向かう心の浮き立つ思いと、感傷的な心情の両面を表現している。「**過去**」は半音階進行と複雑な和音が特徴。「**余韻**」は「アリエッタ」のリズムをワルツに替えて展開する。

ドビュッシー：版画

1903年7月に作曲された「版画」はピアノ音楽史に新たな光を投げかけた斬新かつ精妙な作品で、新境地を拓いた。ドビュッシーは東洋にもスペインにも旅をしたことがなく、豊かな創造と想像の産物ということができる。

第1曲「塔」は1889年にパリ万国博覧会でジャワのガムラン音楽を聴いて触発され、その記憶をもとに書かれた。5音音階による東洋風の主題とリズムで構成されている。**第2曲「グラナダの夕暮れ」**は、スペインの古都グラナダの夕暮れを情感豊かに描いた音楽。ファリャは「空想で書かれたことは奇蹟に等しい」と絶賛した。**第3曲「雨の庭」**は、ドビュッシーが愛したフランス民謡「幼な子よ、眠れ」「もう森へは行かない」を巧みに取り入れた4つの部分からなる変奏曲風の音楽。繊細なアルペジオが庭の木立に降り注ぐ雨を描く。

ドビュッシー：喜びの島

1904年の作。ルーヴル美術館にあるフランスの画家ワトーの「シテール島への船出」から着想されて書かれた。シテール島は愛の女神ヴィーナスの島といわれ、恋人たちが詣でるという。それをピアノの技巧を最大限に生かした楽想で表現、愛の歓喜が全編を彩る。装飾音、リズムの変化、アゴーギグの使用など巧みな書法が用いられている。

ショパン：ノクターン第7番 嬰ハ短調 op.27-1 / ノクターン第8番 変ニ長調 op.27-2

ノクターンはショパンがピアノという楽器の機能、特質、表現力などを存分に生かし、ロマンあふれる旋律を各々の作品に託したもの。**第7番**のピアニシモの6連音符の伴奏音型で始まる主題は暗く悲痛な面持ちだが、次第に深刻さを増し、狂乱のクライマックスに達する。**第8番**は前作とは正反対の甘美な旋律と詩的なハーモニーをもつ。2つの主題が3回繰り返して登場、3度と6度の重音で精巧に装飾され、美しいコーダも印象的。

ショパン：ピアノ・ソナタ第3番 ロ短調 op.58

最後のピアノ・ソナタとなった第3番は1844年の夏に完成され、ノアンで書かれている。しかし、すでにサンドとの仲に不協和音が鳴り始め、祖国の父親の死という悲しい知らせも入り、ショパンの心中はおだやかではなかった。ときに34歳。体調も思わしくなく、精神状態も決してよくない状況のもとでこの作品は生まれた。だが、作品自体は様式が多様化し、楽想もこの上なく豊かで、曲全体の規模も大きくなっている。

第1楽章は第1主題の厳然とした下降音型と上昇音階が印象的。第2主題はニ長調に変わって優雅な旋律をもつ。最後は短いコーダで終わる。**第2楽章**は明確な3部形式をもつスケルツォ。軽快な主題をAとし、コラール風な味わいを醸し出す中間部をBとし、Aの再現へと移る。**第3楽章**はやわらかな南フランスの日差しを思わせるノクターン風なラルゴ楽章。中間部には鮮やかなまでの調性変化が見られる。これも3部形式。**第4楽章**はロンド形式による威風堂々たるフィナーレ。ソナタの締めくくりにふさわしいスピード感と劇的な盛り上がりが特徴。華やかなコーダにおける和音の連打も秀逸。